

小学校で行われる性教育の現状と課題

—外部講師の性教育に対する教職員のアンケートからの考察—

小川 真由子

要旨

近年、児童生徒を取り巻く性に関する問題が急増する中で、学校における性教育への期待は大きい。効果的な性教育の充実を目指して授業形態の工夫や配慮がなされる中で、専門的知見を取り入れるために外部講師による性教育が行われている。これまで「行き過ぎた性教育」による問題や、「外部講師と学校の性教育に対する見解の違い」など問題点も多かったが、互いの連携を密にすることで解決するものとする。そこで、性教育の出前授業を行った小学校の教員に対して質問紙調査を行い、今後の授業構成に役立てるとともに、効果的な健康教育とはどのようなものかを検討した。その結果、性教育を行う上で環境、興味、認識、行動、知識といった5つのカテゴリーの難しさがあることが明らかとなった。また、性教育に必要な配慮は個人および家族という2つのカテゴリーの要因が見出された。そして、教員が外部講師に望むものは、専門的知識、体験学習、認識への働きかけといった3つのカテゴリーの内容が挙げられた。今後はこれらを踏まえて、児童生徒を取り巻く学校、保護者、地域がそれぞれバランスよく連携し継続的な関わりを持つ中で、少しでも児童生徒のその後の生き方に良い影響を与えることのできる取り組みについて、検討していきたいと考える。

キーワード：性教育，小学校，外部講師，アンケート調査，効果

1. はじめに

近年、性に関する価値観の多様化や性に関する情報の氾濫、性犯罪の増加などに伴い、児童生徒を取り巻く性に対する課題は増加の一途をたどるばかりである。それに加え、平均初潮の低年齢化や性交開始年齢の低下¹⁾、「発育加速化現象・性成熟加速化現象」という言葉に代表されるように、発育・発達の前傾傾向がみられ²⁾、学校における性教育の一層の充実が求められている。

学校における性教育は児童生徒の人格の完成と豊かな人間形成を究極の目的とし、これまで体育、保健体育をはじめとする関係教科で指導されてきた。文部科学省は、「生徒指導における性に関する指導」を作成し、「学校はすべての生徒に対して人間の性に関する基礎的・基本的事項を正しく理解させ、自己の性に対する認識をより確かにさせるとともに、人間尊重、男女平等の精神に基づき、男女の人間関係や現在及び将来の生活における性にかかわる諸問題に対して、適切な意志決定や行動の選択ができるよう性に関する指導を充実することが必要である。」

と示した³⁾。つまり、性教育で得られた知識・理解を土台として、正しい判断力を身につけ、その判断のもとに自らが行動に移せるような力を育むということである。中でも、現代の児童生徒にあたっては社会環境の変化に影響され、性の情報に敏感であり、早い段階から興味や疑問を持っている⁴⁾と言われ、小学生の段階から心身にさまざまな変化が現れている。そうした背景のもとに、若年妊娠や人工妊娠中絶、性感染症など性に関する問題の増加や、性に対する歪んだ認識や間違った知識が偏見や差別を生むことにもつながっており、小学校低学年から発達段階に合わせた早期教育が望ましいと天野ら⁵⁾は述べている。そこで本研究では小学生における性教育に焦点を当て、教職員の性教育に関する質問紙調査をもとに筆者が行った小学校での出前授業について分析し考察することで、今後の効果的な授業内容を検討することを目的とする。

(1) 「性教育」と「セクシュアリティ教育」について

I P P F (国際家族計画連盟)⁶⁾によれば、『性教育 (sex education)』とは「妊娠・出産の過程や思春期、性行動などに関する基礎的教育。避妊、性感染症の予防および親となることについての情報なども含まれることがある」とされ、『セクシュアリティ教育 (sexuality education)』とは「青少年が、セクシュアリティについて決断するために必要な、また身体的・情緒的にも、個人的および相手との関係性においても、セクシュアリティを楽しむために必要な知識、技能、積極的姿勢、価値観を身につけられるよう考案された教育」と定義される。つまり、『性教育』は知識を与える教育であり、『セクシュアリティ教育』は知識に加え、技能の習得も目標とされている教育であると言える。このことを踏まえると、学校で行われる性教育が『性教育』よりも『セクシュアリティ教育』であることが望ましいと言える。

しかしながら、本稿における“性教育”の定義は『セクシュアリティ教育』という言葉の概念にとらわれず、上記の両方の意味を含む幅広い範囲での「学校で取り扱われる性に関する教育」とする。

(2) 健康教育について

学校における健康教育の考え方には、さまざまな見解が見られるが⁷⁾、広義と狭義に要約される。広義の場合は、「知・徳・体の調和のとれた心身ともに健康な人間を育成するという観点から、教育活動の全体を健康教育とする考え方」であり、学校の健康観によるところが大きく、すべての教職員を動員して教育活動を展開するという場合である。一方、狭義の場合は、「健康、安全で幸福な生活のために必要な習慣を養うとともに、運動を通じて体力を養い、心身の調和的発達を図るという義務教育の目標に沿って、体育科・保健体育科における保健学習や特別活動における保健指導、安全指導などを通して、生涯を通じて健康で安全な生活を送ることのできる資質や能力の育成を目指す考え方」とされ、学校における健康教育の一般的な考え方になっている。

こうした健康教育の考え方について、平成9年保健体育審議会答申⁸⁾では、「健康教育の目標は、時代を超えて変わらない健康課題や日々生起する健康課題に対して、一人一人がよりよ

く解決していく能力や資質を身につけ、生涯を通して健康で安全な生活を送ることができるようにすることである」とし、以下の資質や能力を身につけさせることが重要であると指摘している。

- ①興味・関心（健康課題に気づくとともに、興味・関心を持つ）
- ②知識・理解（健康についての知識を身につけ、理解する）
- ③思考力・判断力（健康課題をよりよく理解するために考え、判断できる）
- ④意思決定・行動（健康課題を解決するため、意思決定を下し、行動できる）
- ⑤認識（健康の価値を認識する）
- ⑥評価（①～⑤について自分自身で評価する）

よって、学校における健康教育とは健康の価値を認識し、自ら課題を見つけ、主体的に考え、判断し、行動し、よりよく課題を解決できるようにする学習の過程を目標とすべきである。

では、以上のことを性教育という分野で効果を発揮するためにはどうすべきなのか。学校とは教師、施設、教材といった教育の要素や機能を備え、児童生徒の発達段階に対応した系統的な働きかけができる場である。実際の指導にあたっては、講義形式による一方通行的なものだけでなく、ディスカッション、ロールプレイング、教師と学校外の専門家（外部講師）とのチームティーチングなどさまざまな試みがなされている。とりわけ性教育という分野においては、体験に基づく具体的な話を聞き、専門的知識を得たりできるという点で、外部講師による講演会や講話などが効果的⁹⁾とされており、地域の連携という役割も担っていることから、積極的に外部講師を招く実践が増えている。しかし、学校と外部講師との性教育についての見解の違いや「行き過ぎた」内容に対するバッシング¹⁰⁾など、問題点も多いのも事実である。性教育を効果的に展開するためには、学校と外部講師との綿密な打ち合わせや情報交換が必要であることは言うまでもなく、性教育の全体構想を明確にし、性教育を具体化した全体計画を作成する必要がある。

2. 調査概要

2014年7月下旬から8月上旬にかけて、筆者が同年3月に出前授業を行ったA市内のB小学校に勤務する教諭に質問紙調査を行った。質問項目は9項目あり、回答者の属性に関する質問のほかに、授業における健康教育実施経験の有無、性教育の実施経験の有無に関する質問について、数字を記入または該当する回答に○印で選択するものが5項目、その他の項目は性教育を行う上で難しいと考える点や出前授業を依頼した講師に対して望むこと、効果のある健康教育に対しての考えについてなど4項目を自由記載とした。

質問紙調査については、児童の夏休み期間を利用して行われる研修会において本調査の趣旨を説明し、無記名であること、集計において個人が特定されないように処理すること、答えにくい項目は未記入でも問題ないことを伝え、質問紙の提出をもって同意とみなすことを説明し文章で明記した。

3. 結果および考察

(1) 対象者の属性

質問紙の回収が得られたのは16名（男性8名、女性8名）、平均年齢は42±10.13歳、教員歴は17±10.80年であり、その内訳は表1のようであった。また、健康教育を授業の中で取り扱ったことがあるかという質問に対しての回答は表2に示す通り「ある」と答えた方のうち、一人を除いて性教育の内容を取り扱った経験があった。また、どちらも経験がなかった5名は、すべて教員歴が10年未満であり、教員歴と健康教育の経験の関連の深さを示した結果となった。

表1 教員歴の内訳	
教員歴	人数
1～10年目	5
11～20年目	3
21～30年目	5
30年以上	3
合計	16

表2 健康教育の実施経験の有無		
内容	ある	なし
健康教育の実施経験	11 (68.8%)	5 (31.2%)
性教育の実施経験	10 (62.5%)	6 (37.5%)

(2) 性教育の内容

取り扱ったことのある性教育の内容について記入があったものは、「赤ちゃんの誕生の仕組み」、「成長に伴う体の変化」、「男女の体の違い」、「命の大切さ」、「体の名称」などであった。表3に示された小学校における性教育の目標および指導内容に照らし合わせると、おおむね当てはまっていると考えられるが、児童生徒の発達段階に合わせ、系統化された授業内容の構成に取り組むべきであると考ええる。

表3 小学校における性教育の目標および指導内容

目 標		・生命の誕生や心身の発育・発達の男女差や個人差を理解し、自己を大切にすることの心情と態度を育てる。
		・相手の人格を尊重し、思いやる心情や態度を育てる。
		・家庭における役割分担と助け合うことの大切さを知り、適切な判断力を育てる。
指導内容	身体の 発育・発達	(低) 男女の体の違いと性器の大切さ、体の清潔
		(中) 初経の心構え、月経の手当て
		(高) 体つきの変化、精通や月経への対応と不安の解消
	心理的な 発達	(低) 生命の大切さ、両親の愛情
		(中) 生命の誕生と命の大切さ、人を思いやる心
		(高) 二次性徴による心の変化、生命の誕生の仕組みと生命を尊重する
	男女の 人間関係	(低) 男女の協力、自他を大切にする態度
		(中) 性別に関係なく理解・協力する態度
		(高) 相手の立場や気持ちを尊重した友達関係

	社会的な面	(低) 家族の一員としての役割理解、誘惑や性被害を避ける行動
		(中) 家族の一員としての役割分担、有害な性情報への批判的態度
		(高) 性差を考慮した仕事の分担・協力、エイズの理解と正しい判断

(※『学校における性教育の考え方、進め方』³⁾ 文部科学省 平成 11 年 参照)

(3) 性教育を行う上での難しさ

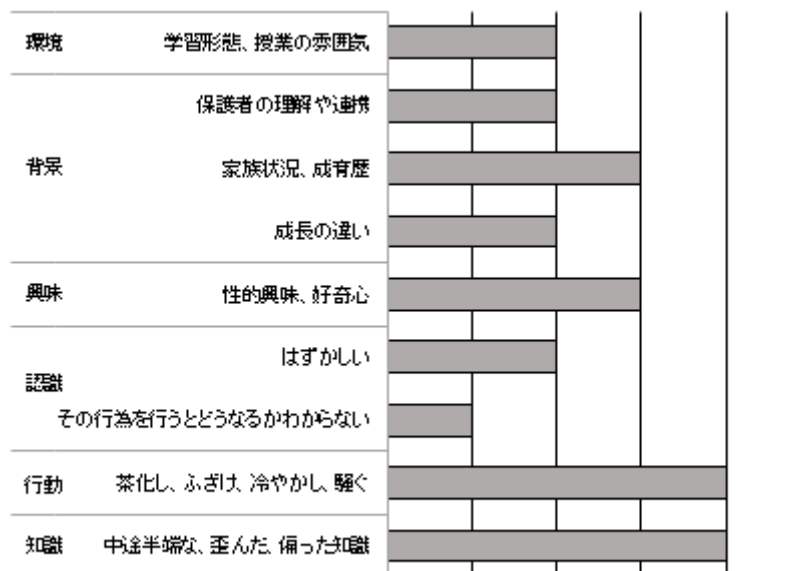


図1 性教育を行う上での困難な点

自由記載で記入された回答を分類し、それぞれ環境、背景、興味、認識、行動、知識というカテゴリーに分け、記入件数でグラフ化したものを図1に示した。「性教育という内容でどういった学習形態が望ましいのかわからない」、「性教育というだけで授業の雰囲気が変わってしまい、取り扱いが難しい」といった『環境』に関する内容、「保護者の理解や連携について」、「一人親家庭や複雑な成育歴を持つ児童生徒への対応」、「個人の成長の違いに大きな差があること」などの児童生徒個人の『背景』に関する内容、「授業内容が性的興味のみ働き、本当に伝えたい内容が心に響かない」、「好奇心だけをかきたててしまわないか心配」など『興味』に関する内容、「児童生徒の恥ずかしいという気持ちが先行して授業に悪影響を及ぼしてしまう」、「悪いと分かっているが実際にその行為を行うとどうなるか分かっていない」といった頭では理解していても行動に伴わない『認識』に関する内容、「茶化す、ふざける、冷やかす、騒ぐ」といった授業中における児童生徒の『行動』に関する内容、「中途半端」や「歪んだ」、「偏った」といった『知識』に関する内容などが挙げられた。

東京都幼稚園・小・中・高・身障性教育研究会の児童生徒を対象とした調査¹⁾では、「異性と手をつなぐことが恥ずかしい」と答えたものが小学校1年生で50%、小学校高学年では80%にも達していることから、小学校就学前から生きる力を育むためのライフスキル教育の一部と

して性教育が取り入れられ、性教育が「恥ずかしい」ものではないという位置づけがなされる必要があると考える。こうした小学校低学年から起こる羞恥心の芽生えへの配慮や早い時期からの性に対する取り組みが、性教育への教師および児童生徒の心構えとして、また地域・家庭など児童生徒の背景要因への良い影響も及ぼすことが出来るのではないだろうか。教職員と保護者の中には性教育を受けた経験が少なく、性教育について抵抗がある人も多い。教職員・保護者に対しても「性教育の必要性」についての研修を行うことが、体制づくりの基盤となり、「性は恥ずかしいもの」という考え方から「性はすばらしいもの」という考え方に変わることを期待したい。また、山本ら¹¹⁾は日本における教育の中での性教育の位置づけを歴史的変遷の側面からたどり、性教育の概念や位置づけがはっきりされていないことを課題の原因として述べている。位置づけについての問題とは、教育課程のなかのどの教科の中で扱うのか、どのような状態で進めるのかなどがあげられる。広瀬¹⁰⁾はその研究の中で、学習指導要領における性に関する定めは、部分的ないし断片的かつ非体系的であり、学習指導要領が「性教育」に関してどこまでのことを定めているのかいないのかということの理解に関しても、様々なニュアンスの違いがあり、そのこと自体が多義的であると述べている。今後、学習指導要領に即した内容を十分に把握したうえで、時代のニーズと発達段階に合わせた具体的な指導内容や題材を含め、系統化された性教育プログラムの開発が必要であると考ええる。

(4) 性教育に必要な配慮

性教育を行う上で必要な配慮についての回答は表3のようであった。その要因ごとに分類した結果、主に個人、家族に起因する背景のものであった。

表3 性教育に必要な配慮

個人	一人親家庭の子どもへの配慮
	親の思いの聞き取り調査の中で、望まれずに生まれてきたと知らされた子への配慮
	成長の個人差に対して不安を募らせないようにする配慮
	特別支援学級の子に対して、その子の心と身体の発達段階を見て指導すること
家族	保護者への理解・連携の必要性
	家族状況や成育歴に対する配慮

浅井¹²⁾は望ましい性教育の在り方と内容について、科学的であること（事実・真実・現実に基づいていること）、性を人権としてとらえること（他人の人権や人格を侵害しない限り、年齢や性別によって性行動は制限されないこと）、自立と共生という考え方と能力を育てること（一人で生きていく人間的力量と、どのような理由によっても偏見や差別をすることなく他者と一緒に生きていく能力をはぐくむこと）が性教育の実践と理論の共通の財産であると述べている。性教育は身体のための科学的な教育ではなく、全人的な教育であり、児童生徒を取り巻く家族環境や成育歴を含む人生そのものへの働きかけが大切であり、それらを含めた「まるごと

の自分自身」を受け入れることが自己肯定感につながるものとする。そのために教職員全員が個人の背景を把握し、情報共有することが、児童生徒一人一人を受け止める体制づくりにつながるものとする。

（５）出前授業を依頼した外部講師に望むもの

外部の講師に対して求めることを尋ねた質問に対しての回答を表４にまとめ、記述内容によって３つのカテゴリーに分類した。産婦人科現場での「実体験をもとにした指導」、命の誕生に立ち会う「現場での思い、願いを伝えてほしい」、「時代のニーズに合わせた内容」などの『専門的知識』に関するものと、出産後の母親から赤ちゃんへのメッセージの紹介や、妊娠中の思いをつづった体験記の紹介といった「普段の授業ではできないような資料の提示」や赤ちゃん人形の抱っこや妊婦体験服の着用などの「体験型教材の利用」といった『体験型学習』、「命の大切さを実感させてほしい」、「児童の興味・関心が持てるような内容」、「安心感、あたたかさが伝わるようなきめ細やかな指導」、「一度のみではなく、継続した関わりが持てる」といった『認識への働きかけ』ができる指導そのものに対する希望などがあつた。

表４ 出前授業を依頼した講師の先生に対して望むもの

専門的知識	実体験をもとにした指導内容にしてほしい
	現場での思い、願いを伝えてほしい
	時代のニーズに合わせた内容を伝えてほしい
体験学習	普段の授業ではできないような資料の提示
	体験型教材の利用
認識への働きかけ	命の大切さを実感させてほしい
	児童の興味・関心が持てるような内容
	安心感、あたたかさが伝わるようなきめ細やかな指導
	一度のみではなく、継続した関わりが持てる

石川ら⁹⁾が行った愛媛県における平成 16 年度学校における性教育の指導に関する調査では、小学校で 11.0%、中学校で 40.4%、高等学校で 69.0%が、外部講師による性教育に関する講演会や講話を実施していた。外部講師による講演会や講話を一時的な指導だけ終わらせないようにするためには、その内容がそれ以外の学校で行われる性教育の指導内容と関連性を持たせることが必要であり、そのためには取り扱う内容を講師任せにするのではなく、学習指導要領の内容に照らし合わせて、学校において主体的に決める必要がある。そして学校と外部講師が内容について事前の打ち合わせを入念に行うことが望ましいと思われる。

（６）効果的な健康教育

効果的な健康教育とはどのようなものであるかという考えについての回答は「習慣化される

もの」、「自分の身体・心・生命を大事にできる子を育てること」、「自分以外に他人のことも考えられるようなもの」、「子ども自身がこれからの生活の在り方を考えることができるようになるもの」、「正しい知識と生命誕生の感動を獲得できるもの」、「身近な存在を子どもたちに意識させ、その方向に向かって努力することの楽しさを味わわせること」、「子どもの実態を十分にとらえ、適切な時期を見極めて題材を取り上げるとともに、継続した取り組みも大切に単発で終わることがないようにする。」といった意見が挙げられた。性教育を含む学校における健康教育は、児童生徒は正しい知識を得たうえでその知識が認識として定着し、適切な意思決定や行動選択ができるようになってはじめて成果が上がったと言える。学校での健康教育が児童生徒の現在の健康への意識付けになることはもちろん、10年後、20年後にも役立てることができるような内容であればそれは効果的だったと言えるであろう。

4. まとめ

平成17年中央教育審議会における「学校教育全体で取り組むべき課題（食育、安全教育、性教育）と学習指導要領等の内容」¹³⁾において、健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会で性教育について次のように述べられている。「我が国では、性に関しては様々な価値観の相違があり、性教育についても様々な考え方があるが、学校における性教育として求められる内容は何かということについては共通理解を図って議論すべきであるという意見が出された。」また、「性教育を行う上で、人間関係についての理解やコミュニケーション能力を前提に、その理解の上に性教育が行われるべきである。」とも言及されている。

学校における性教育の目的は児童生徒の人格の完成と豊かな人間形成にあり、誰もが自分の人生をよりよく暮らしていくための「性の権利」の獲得にあると言っても過言ではない。「性教育」という言葉の中には社会背景や家族状況、成育歴や個人の未来をも含むたくさんの意味が含まれていることを念頭に置きつつ、少しでも児童生徒のその後の生き方に良い影響を与えることのできる取り組みについて、今後も検討していきたいと考える。

謝辞

アンケートに快くご協力いただきました小学校の教職員の皆様と、出前授業でご指導、ご協力いただいている産婦人科クリニックのスタッフの皆様、性教育の授業で使用させていただく資料の提供を賜りました患者様に感謝いたします。

引用文献

- 1) (財) 日本性教育協会編 (2001) 『「若者の性」 白書—第5回青少年の性行動全国調査報告』, 小学館.
- 2) 福原保子 (1988) : 小学生の性に関する認識, 『保健の科学』, 30(2), 70-73.
- 3) 文部科学省 (1999) 『学校における性教育の考え方、進め方』, ぎょうせい.

- 4) 東京都幼稚園・小・中・高・身障性教育研究会 (1996) 『1996 年調査児童・生徒の性最新版』, 学校図書, 31-32.
- 5) 天野敦子ほか (2001) : 小学校における性教育についての教員養成課程学生の意識に関する一考察, 『愛知教育大学研究報告』, 50 (教育科学編), 33-39.
- 6) 国際家族計画連盟 (IPPF) : 専門用語集 <http://www.ippf.org/jp/> (最終アクセス 2014. 10. 23).
- 7) 三木とみ子編 (2013) : 健康教育と学校保健, 『四訂 養護概説』, 35-36, ぎょうせい.
- 8) 文部科学省 : 保健体育審議会 <http://www.mext.go.jp/> (最終アクセス 2014. 10. 23).
- 9) 石川裕子ほか (2006) : 学校における性教育の指導に関する調査研究 (2) - 実践に向けて -, 『愛媛県総合教育センター研究紀要』, 89-97.
- 10) 広瀬裕子 (2013) : 学校の性教育に対する近年日本における批判動向 - 性教育バッシング」に対する政府対応 -, 専修大学社会科学年報第 48 号』, 193-211.
- 11) 山本信弘ほか (1991) : 性教育の歴史的変遷の文献的一考察, 『大阪教育大学紀要』, 39 (2), 203-215.
- 12) 浅井春夫 (1995) : 『子ども虐待と性教育』, 大修館書店.
- 13) 文部科学省 : 中央教育審議会 (2005), 学校教育全体で取り組むべき課題と学習指導要領等の内容 専門部会, <http://www.mext.go.jp/> (最終アクセス 2014. 10. 23).

執筆者の所属と連絡先

所属 : 鈴鹿短期大学 Email : ogawam@suzuka-jc.ac.jp

Current situations and issues of sex education done in elementary school

Consideration from the school personnel's questionnaire
to visiting lecturer's sex education

Mayuko Ogawa

Key Words: Sex education, elementary school, visiting lecturer, questionnaire survey, effect